

ビキニ事件 室戸で伝え続け

【室戸】1954年、米国が太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁で行った水爆実験で室戸のマグロ漁船などが被ばくした「ビキニ事件」を、室戸の生徒に伝える続ける元中学教員がいる。

元中学教員の浜田さん(安芸市)

「広島、長崎そして、私たちがもう一つの被ばく事件を知っています。みなさんにすごく関係がある事件、ビキニ水爆事件です」

4月27日。室戸中学の参観日の授業で浜田郁夫さん(65)＝安芸市川北乙＝がそう切り出した。
浜田さんが室戸の生徒にビキニ事件について初めて授業をしたのは、昭和から平成に変わる89年1月。その数年前に室戸中へ赴任した際、幡多高校生ゼミナール

の生徒たちが室戸で元船員に聞き取り調査をしていると知り、「地元の人がそういうことをやらんといかん」と刺激を受けた。

教員仲間と元船員への調査を始め、水爆実験の危険区域で操業していた漁労長の航海日誌や「航海後、入院する船員が多かった」という証言などを聞き取った。約20人への聞き取り結果をもとに「ビキニ水爆と室戸の漁業」などと題し、被ばくした船員らの当時の

「きのこ雲の下で何が」

生徒とマーシャル関係者調査も

状況やその後の健康被害について生徒に伝えた。

当時授業を受けた半数近くの生徒の父親や親族が遠洋の船に乗っていた。生徒からは「おじいちゃんが乗ってた船も被ばくしていたと知り驚いた」室戸には関係者が多いと知って許せない気持ちになった。浜田さんは「自分たちが生きている時代とつながりのある授業を大事にしたいといけな」と思ったという。

だが、その後の異動で仲間も浜田さん自身も室戸を離れ、調査活動は次第に立ち消えとなった。

再び浜田さんがビキニ事件と向き合うのは「3・11」で福島第一原発事故が起きた2011年。この年

う。

そのため「十分伝え切れていない」と感じていた。
「きのこ雲の下で何が起きていたのかマーシャルの人から話を聞く必要がある」

17年、吉良川中生らと修学旅行で東京にあるマーシャル諸島大使館を訪ねた。ビキニ環礁出身の職員から同諸島で67回に及ぶ水爆実験が行われたこと、がんの発症率が高く、職員の祖父も母親もがんで亡くなっていることを直接聞いた。

19年に退職後も、現職やOBの教員でつくる「ビキニ被災支援室戸の会」などと県内中学校で年に2、3回、授業をするなど伝える活動を続けている。

23年に室戸中で授業した際の「こんな大事なお話をなぜ私たちは知らなかったの？」という生徒の感想に、「伝えてない罪深さに改めて衝撃を受けた」とい

4月、室戸中学校の日曜参観日にビキニ事件などについて授業する浜田郁夫さん(室戸市浮津の室戸中学校)



の4月、室戸市の中川内中に異動となり、元船員への聞き取り調査を再開した。寛があった」と振り返る。

現在、中学の教科書にビキニ事件は「第五福竜丸の事件」として、核軍縮の項目に1行程度の記載がある。だが、室戸についての言及はない。浜田さんは「僕がやっていることを他の先生方にもやってほしい。でもそのためには教科書に記載しないと難しい」と指摘。ビキニ事件について子どもたちが当たり前に知る世の中になるためにも、地道に活動を続けたい」と話している。

10、11日は室戸市領家の市保健福祉センターやすらぎで、被ばくした元船員らの支援や平和の尊さを考える「ビキニデー in 高知2025」が行われる。2日間で2千円、生徒と室戸市民は無料。問い合わせは県原水爆対策協議会(0888・875・3917)へ。(人見彩織)